

立教小学校・玉川学園で実施した 「子どもの哲学」授業の報告

報告者：河野哲也(立教大学)
土屋陽介(茨城大学)
村瀬智之(千葉大学)

立教小学校・玉川学園で実施した 「子どもの哲学」授業の報告

目次

- 実施クラスの基礎データ
- 授業の目標
- 授業の進行
- 先生方からご指摘いただいた反省点
- 授業者の感想
- 子どもたちの感想



実施クラスの基礎データ

○ 実施学校・学年・回数

- 立教小学校5年生・・・私立男子校

10月14日・17日・18日(3回)

- 玉川学園4年生・・・私立共学校・12ヶ年一貫教育(K12)

11月14日・21日・28日(3回)

○ 実施クラスとクラス規模

- 立教小学校:3クラス(A組・B組・C組)

1クラスの数...40人

- 玉川学園:1クラス(松組)

1クラスの数...30人(男子13人・女子17人)

授業の目標(理想)

【1】物事を立ち止まってじっくり考える体験をする。
＝考えることの体験学習。

【2】子どもたち自身が考えたい問題・感じている疑問を、子どもたち自身で問いの形にする。
→自分たち自身で考えたい問題をみんなで共有して、自分たち自身で対話をしながら検討・吟味する。

【3】「考えるための対話」の技術を身につける。

- 理由や例を挙げながら筋道立てて考える。
- 問いあうことを中心に話しあう。
- 自分と異なる意見をよく聞いて考える。・・・etc



授業の目標(理想)

- 【4】答えのない問いを前にして、「**わからない**」「**考え込む**」という体験をする。
- 【5】自分自身の私的な問題を、公的な空間で発言し検討するための練習をする。
- 【6】授業者も子どもと一緒に問いあい、考えを深めていくことによって、「**子どもとともに哲学する**」。



1時間目の授業



1時間目の授業で気づいたこと

- 「ちいさな哲学者たち」を見せて、ふだんの学校の話しあいとどこが違うかを聞くと・・・

“授業っぽくない”

“答えがない(答えがたくさんある)”

“質問を中心に話しあいをしている”

“先生と生徒の役割が逆になっている”

“先生が中心じゃなくて、子どもが中心”

「哲学対話とはどのようなものか？」を口で説明するよりも、実際の対話の様子を映像で見せた方が早く、効果的。



1時間目の授業で気づいたこと

- 立教小学校で1時間目の反省点・・・授業者の立つ位置
 - ▶ 授業者がサークルの真ん中に立つのはよくない。
→ 玉川学園でのやり方がよい。



1時間目の授業で気づいたこと

- 話しあいのテーマは、子どもたち自身からたくさん出てくる。
 - 思いつきを反射的に発言している印象も受けたが、一方で、いま子どもたち自身が気になっている問題が反映されているのも確か。→ 立教小B組の震災関連のテーマ



- 出てきたテーマの間の連関を考えさせる。
- 「包括的な質問」「考えやすい質問」を考えさせる。

ACPCの
研修で学ん
だやり方



- 一部には、抽象的な次元で言葉の整理ができる子どもも。
「幸せと本当に幸せの違い」「友達と優しさの関係」
「愛と友情の違い」



クラスごとに決まった「話しあいのための問い」

- ◆ 立教小学校・A組

死とは何か？

- ◆ 立教小学校・B組

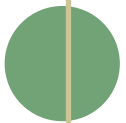
大震災のように予測できない大事件に対して、対策をどうすればいいのか？

- ◆ 立教小学校・C組

本当の幸せって何か？そして、どうやって人生の中でそれに近づいていくか？

- ◆ 玉川学園・松組

未来ってだれがつくる？



2時間目の授業



2時間目の授業の意図

○ ミニグループ対話の時間を設けた意図

・・・全員が必ず質問し、質問される体験をする。*

- 教員の力を借りず、自分たち同士で問いあいながら問題を考える。
- 教員の圧力／みんなの前で発言する圧力を受けずに、気軽で自由な雰囲気の中で意見交換を行う。
- クラスメイトの意見をよく聞く中で、ふだん知らなかったクラスメイトの新しい側面に気づく。
- 「考えるための対話」の技術を練習する。

* 厳密にはうまくいっていない。→特定質問者制度？

2時間目の授業の意図

○「話しあいのルール」の意図

・・・身につけてほしい「対話の技術」のポイントを絞る。

- (主張ではなく) **質問を中心**に話しあいを進める
- 「**意味**」「**理由**」「**例**」の質問に特に焦点を絞る



ある程度は成功。

「質問・答え・質問・・・」や「どういうこと？なんで？たとえば？」が合い言葉化していく。



2時間目の授業で気づいたこと

- 最初の説明でルールのどこを強調するか、また、仲良しグループを分断するか否かで、対話の質がだいぶ変わる。
 - 仲良しグループは分断した方がいい。
 - 「いっぱい質問をしよう」「理由をあげて反論してみよう」という指示を出すと、相手の話をよく聞くのではなく、相手を質問攻めにして「問いつめる」対話に流れがち。→ 感想[4]
- ↓
- 説明のポイントを変える。
 - 「相手の話は最後までよく聞こう。」
 - 「質問にはすぐに答えられなくてもいいよ。ゆっくり考えて。」
 - 「考えている間は待ってあげよう。」

2時間目の授業で気づいたこと

- 説明の試行錯誤を繰り返した結果、最後に行った玉川学園の授業では、最終的には教員がすべてのグループから撤退してもよい雰囲気では対話は進んだ。



3時間目の授業



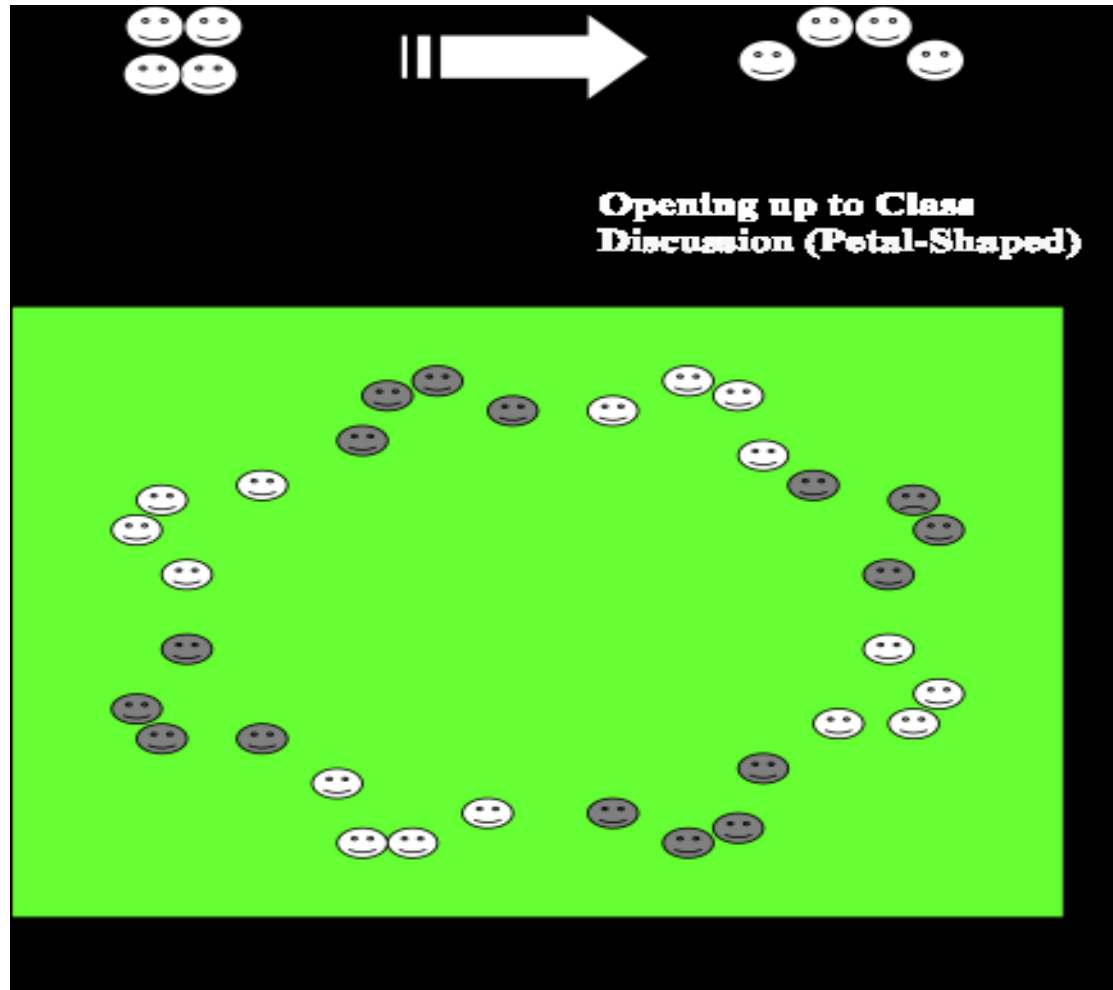
3時間目の授業の意図

- 中グループ対話の時間を設けた意図
 - クラス全体で対話する前のアイスブレイク。
…中グループであればまだ話しやすい。→ 感想[11]
 - 前は別々だったグループを合流させることで、前回のグループごとの議論に新しい刺激を与える。
 - 隣の中グループの発言も何となく耳に入ってくる環境で対話することで、クラス全体での対話に繋げる。
- [ミニグループ→中グループ→クラス全体]と対話の規模を少しずつ大きくしていくやり方は、シンガポールの **Raffles Institution** におけるP4Cの手法をヒントにした。



シンガポールの Raffles Institution におけるP4C “Petal-Shaped Arrangement for Class Discussion”

Kristie Chen Kim Hong, “Philosophy Programme in Raffles Institution, Singapore”



シンガポールの Raffles Institution におけるP4C “Petal-Shaped Arrangement for Class Discussion”



A stepped Approach to Developing the Community of Inquiry

- Stage 1**
Teacher-led/ **Role-modeling**
 - “Petal-shaped” Arrangement
- Stage 2**
Teacher-facilitated/ **Enabling**
 - Differentiated Student Activities
- Stage 3**
Student-facilitated/ **Reinforcing**
 - Group discussion (split into small grp discussion)



玉川学園・松組の3時間目

○ プリントを使った論点の整理

◆ 「みんなにきょうつうする未来 ⇔ 自分の未来」という対立軸

(1) みんなにきょうつうする未来・・・みんなできめる

自分の未来・・・自分できめる

↓↑

(2) みんなにきょうつうする未来・・・「天才」や「せんきよでえらばれた人」がつくる

(3) みんなにきょうつうする未来・・・科学者がつくる

(4) 自分の未来・・・親がつくる

玉川学園・松組の3時間目

○ プリントを使った論点の整理

◆ 「ゆめのある未来 ⇔ ふつうの未来」という対立軸

(5) ゆめのある未来・・・自分がつくる

ふつうの未来・・・だれでもない

↓↑

(6) 未来はだれもつukれない



玉川学園・松組の3時間目

- 以上の点について、プリントを使って5分くらいじっくり解説した後、「未来ってだれがつくる？」という当初の問いに戻り、この問いの形で中グループ・クラス全体で対話を行った。



結果、授業者もファシリテーターの立場から一参加者に近づいて、「**子どもとともに考えた**」という満足感を得られる対話を行うことができた。

- ✓ 「変えられる未来」と「変えられない未来」をめぐる対話



立教小学校・A組の3時間目

- 他方で、3時間目の授業は、1時間目・2時間目と比べて反省すべき点が特に多い。

- ✓ 立教小学校・A組の授業を振り返る



立教小学校・A組の3時間目

○ 反省点

- ◆ 授業者が立ち、生徒が座り、発言のたびに生徒が起立する。
- ◆ 1回目に子どもたち自身が決めた問いではなく、授業者が新たに設定し直した問いを使って対話をしている。
 - 自分たちが決めた問いが、何の承諾もなく一方的に却下されることによって、参加のモチベーションが低下する。
 - 前回まで考えを積み上げてきた問いとは別の問いが、いきなり示されることによって、なかなかすぐには考えをまとめて発言することができない。

立教小学校・A組の3時間目

○ 反省点

- ◆ 中グループ対話からクラス全体での対話への接続がうまくいっていない。→ 感想[29]
 - 中グループ対話とクラス全体対話の間で**話題の断絶**が生じ、中グループで考えたことが全体での対話に反映できていない。
- ◆ 結果的に、クラス全体対話での発言者がかなり偏り、授業後のクラスに悪い影響を与えてしまった。

先生方からご指摘いただいた反省点

立教小・立教大の共同研究授業 A組3時間目

- キリスト教の学校として、「死」というテーマが適切か？
- キリスト教の視野(死生観)を踏まえた上での授業展開
- 2時間目と3時間目の繋がり of 薄さ
- テーマの選び方にもっと配慮があるべき → 感想[3][6]
 - 身近な人を亡くした生徒がいるときに、「死」をテーマに話しあわせたりするのはどうなのか？



授業者の感想

- 小学生たちの、好奇心・探求心の旺盛さと、物事を抽象化して考える能力の高さに驚いた。
→ 小学生の方が、中高生よりも、哲学の授業はやりやすい？
- しかし、彼ら／彼女らにとって、今回の体験は、彼ら／彼女ら自身が抱える本当に切実な問題を、言葉を使って粘り強く考える姿勢を身につける上で、本当に役に立っているのだろうか？



授業者の感想

- また、それ以上に、自分の哲学対話ファシリテーターとしての未熟さを痛感した。

- 身体的な振るまい
- 注意力
- しゃべりすぎない・まとめすぎない
- 発言者の話をよく聞く
- 発言者の言葉を不用意に言い換ええない
- 発言者同士での対話の促進に努める
- 沈黙に耐える

・・・etc



謝辞

- 今回授業をさせていただいた、立教小学校と玉川学園の先生方および関係者のみなさまに、深く御礼申し上げます。どうもありがとうございました。
- そして、拙い授業を受けてくれた、立教小学校5年生のみなさんと、玉川学園4年生のみなさんに、いちばんの感謝を述べたいと思います。みんな本当にありがとう。

